

3月15日（日）サムエル記第一28章20節

「すると、サウルはただちに地面に倒れて棒のようになり、サムエルのことばにおびえた。しかも、その日一昼夜、何も食べていなかったのので、力は失せていた。」

昨日も書かせていただきましたが、主は亡くなったサムエルの霊を用いて、ご自身のみこころを伝えました。それを聞いたサウルは、その場で倒れてしまいます。サウルは、敗戦と同時に自分と息子たちの戦死を知らされ、大きな恐れを感じました。サウルが一昼夜何も食べていなかったことについて、その理由は分かりかねますが、何も食事をしなかったのですから力が失せていたのは当然かと思えます。しかし、ただ単に食事をしていなかっただけではなく、自分が決して望まない結果がみこころとして伝えられたことも精神的に大きなダメージを与えたことでしょう。

私たちも、自分の望まないことを告げられたり、自分が望まない方向へと主が導かれたなら、ショックを受けたり、動揺したり、精神的に大きなダメージを受けることもあるでしょう。そして、サウルのように力を失ってしまい、何もする気力が起きないということがあるかもしれません。私たちもクリスチャンになれば、その時から感情がなくなるわけではありませんので、さまざまな喜怒哀楽が出てくるのは当然です。その一方で、サウルはここでどうすべきだったのでしょうか。やはり主の御前に示される罪を悔い改めるべきでした。特に、18節で「あなたが主の御声に聞き従わず、主の燃える怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ」と、明確にサウルは罪を示されているのですから、そのことを謙遜に悔い改めるべきでした。私たちも感情に動かされるだけでなく、思い当たる罪があれば主の御前に謙遜に悔い改めることが必要です。

3月16日（月）サムエル記第一28章21～25節

「今度はあなたが、このはしめが申し上げることをお聞きください。パンを少し差し上げます。それをお食べください。お帰りのとき、元気になられるでしょう。」（22節）

3節に「サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた。」とありますが、霊媒は公に禁止され、この戒めを破る者には死刑が科せられましたが、霊媒はなおもイスラエルの中に存在し、身の安全さえ保証されれば、いつでも霊媒を行ったということです。そのようにカナン風の風習がイスラエルに深く浸透していて、なかなかそれらを完全に排除することが難しかった現実を見ることができます。しかし、王自らが戒めを破って霊媒師のもとへ行き、そのような大罪を犯したサウルに、主はサムエルを通してみこころとして戦いの敗北とサウルと息子たちの死を語りました。サウルは、主からのさばきの宣告をただ受け入れるしかなく、これから戦いが始まる中で、19節にありますように、主がサウルとイスラエルをペリシテの手に渡され、サウルと息子たちは死を味わうことが必ず成就することを知ることとなります。主は私たちに対する祝福と恵みの約束も必ず成就されま

すが、私たちに対するさばきも必ず成就されます。私たちの上に主が成し遂げてくださるみわざは、恵みと祝福に満ちたものとなるでしょうか。

この霊媒の女は、サウルに食事をするようにと強く勧めます。しかし、サウルはそれを断ります。あまりの精神的ショックが大きすぎて、食欲もわかかなかったのかもしれませんが。それでもなお家来と霊媒の女がしきりに勧めたので、床の上に座り、用意したものをサウルと家来たちが食べて、その夜彼らはそこを立ち去りました。サウルは、どんな気持ちで食事をし、そこを去ったのでしょうか。私たちも信仰の歩みをもう一度やり直すことはできません。今日なすべき悔い改めは今日なすべきであり、今日すべきことは、主の御前にあって今日なすべきです。すべてにおいて後悔する時は、手遅れになった時です。

3月17日（火）サムエル記第一29章1～11節

**「だから今、穏やかに帰ってくれ。ペリシテ人の領主たちが気に入らないことはしないでくれ。」
（7節）**

ペリシテ人は全軍をアフЕКに、イスラエル人はイズレエルにある泉のほとりにそれぞれ陣を敷きました。（1節）2節にはペリシテ軍の出陣の様子が記されていて、ダビデとその部下もアキシユと一緒にその後に行きました。しかし3節からペリシテ人の首長たちのダビデに対する疑いから来る不満が述べられています。4節には「戦いの最中に、われわれに敵対する者となってはいけない。」と言い、いつ寝返るか分からないとの疑いの目をダビデに向けていました。そして、自分たちの首を主君であるサウルに差し出して、自分の手柄にするのではないかと言います。5節の歌は、18章7節に出てまいります。これはダビデによってゴリアテが倒され、ペリシテが大敗北を喫した時に、歌われたものでペリシテ人からすれば忘れられない屈辱的な記憶として残っていたでしょう。アキシユが「私のところに落ちのびて来てから今日まで、私は彼に何の過ちも見出していない。」と説得を試みましたが、無駄でした。

6節からアキシユは、ダビデに何の落ち度も見出せず、行動をともにしたかったけれども、領主たちはダビデが参戦することを良く思っていないので、穏やかに帰るように言います。8節でダビデも反論はしましたが、その後のアキシユの説得に屈して、そのままダビデと部下たちは、ペリシテの地へと帰って行きました。もし、ここでダビデがイスラエルとの戦いに加わっていたらどうなっていたでしょうか。恐らく、サウルの死後ダビデがイスラエルに帰ったとしても、彼らはダビデを歓迎はしなかったでしょうし、彼を次期の王にしようとは思わなかったでしょう。もしそのようなことになれば、すべて主の計画が実現しないこととなります。主は必ずみこころを成し遂げられるお方です。この場合も8節でダビデがどのような思いをもってアキシユに反論したかは分かりませんが、主はあえてこのようにダビデがイスラエルとの戦いに出ることがないように導かれたので

す。

主は、私たちに対しても必ずみこころを成し遂げられ、それを人は妨げることはできません。また、私たちにとって不都合であったり、なぜと思える中であっても、主のみこころのなることが最善であることを信じて、主の導きにすべてをゆだねて従いましょう。

3月18日（水）サムエル記第一30章1～6節

「しかし、ダビデは自分の神、主によって奮い立った。」（6節）

確かに主はサウルが率いる同胞のイスラエル人との戦いにダビデが参加することを避けさせてくださいましたが、三日目にダビデとその部下がツィクラグに戻ってみると絶望的な状況を目にします。アマレク人がネゲブとツィクラグを襲って、火で焼き払い、そこにいた女たちを大人も子どももみな捕らえ、自分たちのところへと連れ去りました。5節にはダビデの二人の妻も連れ去られたことが記されています。6節で「ダビデは大変な苦境に立たされた。」とあります。その理由として「兵がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩ませ、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したから」でした。もちろんダビデの部下たちは、彼が頭を下げて頼んだから行動をとともにしたわけではありません。むしろ部下たちの方からダビデと行動をとともにするようになったのですが、ある意味ダビデに従う中で、こんなはずではなかったという出来事の中で、もはや我慢ができないという思いにさせられたのだらうと思います。私たちも信仰を持ってから、すべてを捨てて主に従っていく中で、こんなはずではなかったと思うような中を通された方があるかもしれません。ダビデとともにいた兵たちのように、泣く力もなくなるほど泣かなければならなかったところを通された方があるかもしれません。しかし、主が導かれる時には、必ずしも自分にとって都合のいいことばかりが続くとは限りません。ペリシテとの戦いは避けられてもアマレクの略奪にあうというような中を信仰生涯で通されることもあるのです。

そして、二人の妻のことでともにいた兵たちと声をあげて泣き、信頼していた部下たちが自分を石で打ち殺そうとしている、まさに大変な苦境に立たされる中で、ダビデは主によって奮い立ちました。詩篇の中のダビデの詩にありますように、声をあげて泣いたダビデは、それ以上に主に向かって声をあげたのでしょう。主の御名を呼び、主の助けを祈り求めたことでしょう。その結果彼は主によって奮い立ったのです。6節で主はダビデにとっては「自分の神」だと言われています。主は私たち一人ひとりにとりましても自分の神です。私たちは、苦境に立たされた時も、また日常のどんな場面にあっても、自分の神、主によって奮い立っていますか。祈りをもって主の御名によって祈りに答えてくださる生ける主、そして私たちのためにみわざをなしてくださる主に呼ばわっているのでしょうか。

3月19日（木）サムエル記第一30章7～15節

「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」（8節）

大変な苦境の中に立たされながらも主によって奮い立ったダビデは、主のみこころを伺おうと、ノブの祭司であったアヒメレクの子、祭司エブヤタルにエポデを持って来るように命じます。ダビデは主にあの略奪隊を追うべきか、追いつけるかを伺います。そうしますと、「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」との答えが主からありました。私たちは苦境に立たされると、慌てて右往左往してしまうことがあります。自分でどうすることもできない時にこそ、すべてを主にゆだねて、主のみこころを伺いつつ、主が祈りに答えてなすべきことを教え、祈りの答えが主から与えられることを静かに信仰を持って待つべきです。

主から答えをいただいたダビデは、六百人の部下とともに出ていき、ペソル川まで来ました。三日間の行軍の後だったからでしょうか、疲れ切ってペソル川を渡れなかった二百人はそこにとどまり、残りの四百人で追撃を続けることにしました。ダビデとしては一人でも多く追撃の兵がほしかったはずなのに二百人もの兵を残さなければなりません。しかし、主がみわざをなすことにおいて、人数の減少は決して妨げにはなりません。むしろ主は人の目から見て不利な条件のもとで働かれることにより、ご自身の栄光を現わされるお方です。

野で一人のエジプト人がダビデのもとに連れて来られました。三日三晩食べることも飲むこともしなかった彼に、食べ物と水を与えることで彼は元気を回復しました。13節で彼はエジプトの若者でアマレクの奴隷であると言います。三日前に病気でもに行軍することが難しくなると、主人はこの人を置き去りにしました。14節でこの者は正直にアマレクに属して、いくつかのユダの地域とツィクラグを攻撃したことを認めました。ダビデは、この者に略奪隊のところへ案内するように頼みます。もし、このエジプト人に出会わなければ、ダビデと彼の兵たちはアマレクの略奪隊を見つけることに苦労したことでしょう。まさにダビデたちが、このエジプト人に出会ったことも主の取り計らいと言えます。まさに、「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる」（8節）と言われた主は、最後まで責任をもって導き、ご自身のみことばによる約束を成就してくださるのです。

3月20日（金）サムエル記第一30章16～20節

「ダビデは、アマレクが奪い取ったものをすべて取り戻した。ダビデは、二人の妻も救い出した。」（18節）

ダビデは、アマレクの奴隷であったエジプトの若者を助けましたが、彼の道案内によりダビデと部下たちはアマレクの陣営を発見することができました。彼らは、ペリシテ人やユダの地から奪っ

た分捕り物が、とても多かったので、羽目はずして、お祭り騒ぎをしていました。そのように油断している敵を、ダビデは、その夕暮れから次の夕方まで彼らを討ち、らくだに乗って逃げた四百人の若者たちのほかは、一人も逃れることができないほどの大勝利を収めました。18節の「ダビデは、アマレクが奪い取ったものをすべて取り戻した。」とは、19節の「ダビデは、これらすべてを取り戻した。」に、そして18節の「ダビデは二人の妻も救い出した。」は、19節の「子どもも大人も、息子たちも娘たちも、分捕られた物も、彼らが奪われたものは、何一つ失われなかった。」に、それぞれ呼応しています。つまり、これは、何一つ失われることなく、すべて取り戻したことを強調的に語っているのです。なぜなら、大変な苦境に立たされ、兵がダビデを打ち殺そうとまでしていましたが、主の助けによって、ダビデは、立たされていた大変な苦境から救い出され、逆に20節ではすべて羊と牛を奪い、兵たちはそれをダビデの戦勝品だと言い、今度はダビデを称えたのです。

このことを通して、主は語られたとおりにみわざをなし、私たちをもあらゆる苦境から救い出してください、ご自身の栄光を現わされるお方であることを、私たちも知ることができました。私たちが苦しい時にこそ主に頼り、主に助けを祈り求めたいと思わされます。主は必ずみことばのごとくに、私たちを助けてくださいます。

3月21日(土) サムエル記第一30章21~25節

「兄弟たちよ。主が私たちに下さった物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちが襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。」(23節)

21節から新たな別の問題が生じます。昨日見ましたように、アマレク人を討って奪われたものをすべて取り戻しただけでなく、羊や牛を分捕り物として得ることができました。ダビデとともにいたのは六百人でしたが、疲れ切ってベソル川を渡れなかった二百人は、そこにとどまっていた。(10節)ダビデは戦いの後、そこまで来て、ダビデと彼に従って迎えに出て来た者たちに安否を尋ねました。ところが、ダビデと一緒にいった者たちのうちから、アマレク人との戦いに行かなかった者たちには、自分たちが取り戻した分捕り物を、分けてやるわけにはいかないから、自分の妻と子どもを連れて帰るように主張しました。(22節)この主張を当然の主張だと言う人もあります。しかし、聖書はこの人たちを「意地の悪い、よこしまな者」と呼んでいます。つまり、聖書は決して彼らの主張を認めてはおらず、むしろ批判的に見ていることが分かります。

さらにダビデも、23節で自分たちの分捕り物については、「主が私たちに下さった物」と言っています。つまり、自力で自分たちが獲得したものではなく、それは主が恵みとして自分たちに下さった物だということです。さらに「主が私たちを守り、私たちが襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。」と言います。つまり、アマレクの略奪隊に勝利し、奪われたものを取り返し、分捕り

物まで手に入れることができたのは、決して自分たちだけの働きではなく、主が自分たちを守り、略奪隊を自分たちの手に渡してくださったからだと言います。だから、主からの恵みとして、戦いに下って行った者も、荷物のそばにとどまっていた者も分け前を同じように分け合わなければならないと言ったのです。

私たちが普段受け取っている物は、すべて主が恵みとして下さっている物です。それにもかかわらず、私たちは自分の能力や力で自力で得たとばかりに、自分だけのものにしてしまっていることはいないでしょうか。恵みとして周りに分け当たることになされているでしょうか。主から意地の悪い、よこしまな者たちと呼ばれてはいませんか。